

SCOUTING 茨城

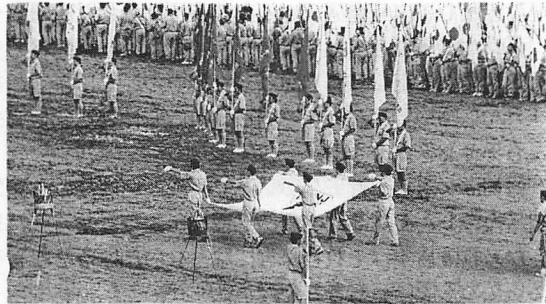
1998年・12月☆茨城県連盟広報委員会発行

第12回 日本ジャンボリー特集号

「夢と感動 — 森吉の自然を楽しもう」

第12回日本ジャンボリーは、8月3日から8月7日秋田県北秋田郡森吉町、森吉山麓高原で開催されました。会場は、森吉山の東北に広がるノロ川牧場の中にあり、周囲を約7,000ヘクタールのブナ原生林が囲む「森吉山県立自然公園」内の高原地域で熊が出没するほど自然が豊かなところでした。ジャンボリー開催中は雨の日が多くキャンプ生活はとても快適とは行きませんでしたが、スカウト達は持前の明るさと普段の活動の成果を發揮して国際親善にプログラムにと大活躍していました。

茨城県連からは派遣団480名、GHQ要員41名、SHQ要員31名、本部員6名、奉仕隊要員28名、合計586名が参加しました。



第12回日本ジャンボリーを終って

派遣団長 川又 光男

第12回日本ジャンボリーが、8月3日から5日間、夢と感動—森吉の自然を楽しもうのテーマで、クマゲラの生息するブナの林に囲まれた、自然豊かな森吉山麓高原にて開催された。茨城からも12ヶ隊、奉仕隊1隊、GHQ、SHQ奉仕スタッフ、派遣団本部員等586名が参加、4ヶ隊は北海道が担当するISCに、8ヶ隊は茨城、栃木、群馬、埼玉4県連が担当する3SCに、奉仕隊はGHQ需品部に配置。奉仕隊及び我々奉仕スタッフは7月31日、8月1日の両日先発、雨の歓迎を受け苦労の設営や派遣団の受入れの準備に汗を流す。3日の朝1夜をかけて到着したスカウト達は疲れも見せず元気に設営開始、幸い連日の雨も、今日の

閉会式を待っていたかのように晴れ間を見てくれた。内外のスカウト2万7千名がアリーナに会し、1時間半に亘り、厳粛かつ盛大に挙行された。いよいよ明日からは、ジャンボリーの様々なプログラムが展開される4年に一度のスカウトの祭典を楽しみ、仲間と力を合せ日頃の訓練の成果を発揮し、各種のプログラムに挑戦しハイオニア賞が総のスカウトの手に渡ることが期待される。今回の特色として会場周辺の各種ハイキングコースや探訪コース、広大な草原を利用した北欧の杜ゾーンでのダイナミックなプログラム等沢多様、更に13のSCが用意した夫夫のユニークなプログラムも待っている。5日には皇太子殿下をお迎えして、全員参加のジャンボリーランチ会がアリーナで開催された。地元の伝統芸能綴子太鼓の披露、外国スカウトの演技、女子のマーチングドリル等楽しい演技が繰り広げられたが、注目は、各SCの代表スカウト200名が競演する日本ジャンボリー記念パレードだ。夫夫のSCが趣向を凝らし、地方色豊かなもリハーサルを重ねジャンボリーランチ会と云う大舞台での競演は、将に圧巻であり忘れ得ぬ思出の一つであろう。7日は宗教行事、環境整備を済ませ閉会式を残すのみ、森吉の豊かな自然を舞台に各種プログラムに挑戦し新らしい友と出会い、友情を深め、様々な体験や多くの思い出を胸にアリーナに集い、名残りの閉会式、感動のフィナーレを迎えた。小雨の夜空を焦がすあの有名な大曲の打上げ花火を以て、20世紀最後の日本ジャンボリーの幕は閉ざされました。天候には恵まれず何時も雨具を持ち、遠いアリーナ迄は歩くこと2時間、ゴミは7分別し汚水は簡易濾過器を通して、天幕の側溝を掘らぬよう雨水の流れを考え起伏を利用して設営する等、自然環境を保護し、地球に優しいキャンプを工夫しながら過した貴いスカウト達の経験は、今後の生活の中でも必ず生きることと思う。今回は35ヶ国500名の外国スカウトが参加され、茨城もタイとスリランカの二ヶ国6名のスカウトをお世話することになったが、1隊の吉田、2隊の若林両隊長が快くお引受け下され親身のお世話を下さった。お蔭で両国の派遣団長より大変感謝をされ、国際親善の一端を果たすことが出来たことは

感謝に堪えません。遠く不便な処を見学に来られたスカウトの諸君や御父兄、指導者の方々の訪問には一同大変元気付けられました。今回のジャンボリーが事故もなく、成果を収め元気に帰郷出来ましたことは偏に混成のスカウト達をよく纏め御指導下された各隊長さん方の御苦労の賜と心から感謝申上げます。また一年も前から3SCを担当する4県連のスタッフと、度々会議を持ち、現地を視察し、綿密な計画と周到な準備をされ、更に先発し雨に濡れ泥に塗れ、早朝から時には夜を徹し全スタッフが一丸となって努力された奉仕の賜と心から感謝申上げます。亦蔭の力となって唯黙々と奉仕をされたベンチャーの諸君にも心から感謝申上げます。

最後に万般に亘り御協力御援助を賜りました堀江12NJ特別委員長、武田派遣団別団長はじめ派遣団本部員の皆様本当にありがとうございました。心からお礼申上げます。

スリランカスカウトとの5日間

茨城第2隊隊長 若林 新一

「茨城県では外国人スカウトを第1隊と第2隊で引き受けます。」

埼玉県で開かれた3SC隊長会議でいきなりそう言われてしまった。

「えっ!!そんな話聞いてないよ。」

何せ、私は何が苦手といって学生時代英語が一番の苦手だった。気になって会議の内容が頭に入ってこない。でも、「すぐ近くにSHQがあるので困ったらSHQに来れば良いからそんなに言葉の心配はしなくていいよ。」と言われて断ることが出来なくなってしまった。

さて、設営が進んでる正午近く「外国スカウトが待っているから迎えに来てください」とのこと。「さあ、いよいよきたか。」ドキドキしながら県連本部まで迎えに行くと、そこに待っていたのはがっちりとした体格のリーダー1名とスラッと背が高く顔の小さなスカウト2名。紹介してもらい挨拶を交わしたものその後の言葉がでてこない。テントサイトまで案内する間、なんと言葉を交わしたらよいかそのことばかり考えていた。そのようなわけで初日はなんとなくスカウトもリーダーもよそよそしい雰囲気で終わってしまった。

その空気が一変したのが2日の夜である。私が野営区の隊長会議から戻ってみるとスリランカスカウトの回りにみんな集まって楽しそうに何かやっている。そういううちに上班を中心にスタンツ大会をやろうということになったらしい。狭いテントサイトの空きスペースにぐるーと輪になって各団得意の出し物から始まった。そしてスリランカスカウトの番。一人が横笛を吹き一人が歌う。歌っている歌詞は分からなくともリズムは分かる。みんなで手拍子を打ちながら



聞く。横笛の音色に触発された副長が笛を借りて祭ばやしを吹き始めた。おもわぬ横笛の競演に拍手喝采。おまけに横笛までプレゼントされてしまった。あまりの盛り上がりに野営管理に注意をされる始末。しかし、それからはスリランカスカウトの周りに常に何人かのスカウトがいるようになった。リーダー同士も片言の英語で交流が始まったのは言うまでも無い。

4日目。今日は3SCフェスティバルで彼達がファイダーンスを披露してくれるという。テントサイトでのリハーサルにも全員圧倒されてしまったが、本番での迫力及び彼達のプロ並の多芸ぶりに感心させられてしまった。彼等はいわゆる日本の富士スカウトだという。やはり、国を代表して来るスカウトは違う。

いよいよお別れ。テントサイトでみんなで見送った後、何人かのスカウトと3SCの本部まで送っていった。そして、自分達のサイトに戻ろうとしたら最年少のスカウトが泣き出しちゃった。思わず展開に私もそのスカウトにつられて思わずウルウルしてしまった。「みんな同じ気持ちだよ。同じスカウト仲間、また会えるチャンスがあるさ。」

最初は、言葉が通じないことで不安だらけだった外国スカウトとの生活。お互いに理解しようとする気持ちがあれば言葉はそれ程障害にならないということをあらためて思いしらされた。

私にとってもスカウトにとっても非常に貴重な体験を通じて“夢と感動”を与えてくれた5日間であった。



12NJを振り返って(12NJ日記より)

茨城10隊隊長 佐藤 吉雄
さあ!ついたぞ、あちらこちらにカラフルなテント

が立ち並び、一大テント村が出来つつありました。昨夜7時ごろ土浦を出て約13時間後の8月3日8時に、我が10隊総勢39名は、“夢と感動の地”森吉に足を踏み入れたのでした。

さてと、10隊のサイトは、ぎょ！ぎょ！池があるではないか。さてどうしたらものか。手慣れた副長たちは、この池を利用して庭園風テントサイトを作り上げました。副長を中心にスカウトたちが設営している間に、私も一仕事です。3SCの狭いテント村を駆け巡り、第2野営区長に挨拶をし、SCHに到着手続です。サイトに戻り、皆元気して、と言い合っているうちに開会式の時間です。

アリーナまで約1時間ブナの原生林の中を歩き回りました。1時間の丘越え山越えだけで私の膝はがくがくでした。だけど開会式には感激しました。全国から集まったスカウトたちの赤、白、スカイブルーの隊旗の波には圧倒されちゃいました。

8月4日は野外プログラムの日。スカウトたちを早朝4時にたき起こし食事をとらせ、5時にはサイトを追い出してひとまず安心。これが良くなかった。ホッと気を許したときに魔がさすもので、県連本部から注意が翔んできた。勧められたとはいへ飲んだ私が悪いのだ。気をゆるめちゃ一いけないと県連から愛の鞭でした。有り難うございます。

8月5日はジャンボリー大集会。儀仗兵による足並みが揃い統率の取れたマーチングドリルに感激しちゃいました。原隊でもあのように整然とした隊列が組めるようにならなあ！と夢に描いてしまった。森吉はいろいろな夢をみさせてくれるが、これはちょっと無理な話なのかなと現実に戻る私でした。

そうそう、ジャンボリー大集会のメインゲスト皇太子殿下のさっそうたる姿、スカウトたちを暖かく見つめた毅然とした姿、格好良かったね。

8月6日降りみ降らずみの日、スカウトたちはパイオニア賞を目指して今日も元気にさすらいのチャレンジャー。おかげさまで10隊のスカウト35名全員のパイオニア賞を申請することが出来ました。いやさか——！隊長としてこれほどうれしいことはない。

8月7日一日中雨、スカウトたいはテントウの虫！と思いつきや晴れたぞー、閉会式だー！1時間の山道を歩いてアリーナへ、演出宜しく隊旗の行進、お別れのジャンボリーの歌、最後に感動の打ち上げ花火！“夢と感動”に酔いしれたジャンボリーでした。だけど森吉は、自然の厳しさをも教えてくれました。閉会式終了と同時に大スコールです。森吉のブナの林は、「スカウト諸君、自然環境に優しいキャンプとはもっとも厳しいものですよ」と教えてくれているようでした。

ボイスカウト活動にはまりそうです!!

「夢と感動」

3SC34隊 派遣隊長 鈴木 卓

12NJの派遣隊長という大役を引き受けました。

長い準備や多くの会議、事前訓練、荷物の搬入等、多くの人達の協力を得て、大会本番に望みました。

場所は、秋田県森吉山麓高原。ブナの原生林に囲まれた、縁あふれる場所でしたが、森の天候と野営地の地形、位置等の条件は厳しいものが有りました。その中、五泊六日、NJ大会は始まりました。

テーマは「夢と感動」。スカウト達は、ブナ原生林の大自然の中で、日頃の訓練で身に付けた技能を発揮し、素晴らしいプログラムに挑戦する。そしてパイオニア賞取得に頑張る。そんな姿を見ていると、私もスカウト達に負けてはいられないという気持ちになりました。

環境保護が世界規模の問題と成っている今日、美しい大自然での生活を通して、スカウト達は、その大切さを学んだ事と思います。六日目には、全員参加手帳を提出し、パイオニア賞を申請。そして夕方、パイオニア賞を受け取る事が出来ました。悪天候の中、良く頑張りました。又、泥にまみれながら多くの新しい友と出会い、友情を深め、楽しさと美しい思い出を残した事と思います。

NJも開会式で始まり大集会、そして閉会式と日程は進んでいきました。



大会中色々な事がありました。私と、青木、畔上両副長、スカウト、共に疲れていましたが、私としては、夕食準備が途中でも、閉会式には、どうしても参加させたい。そう思いました。「よーし行くぞ」という掛け声で各班ごと確認し合い、上班を先頭にアリーナへ出発。天候は小雨が降ったりやんだりで、このまま降らずにと祈りつつ、会場に到着。班員確認しようにも人が多いため確認するには無理があり、その場所で見る事にしました。雨が降り出し、日は落ち、土砂降りに見舞われながらも、セレモニーが始まりました。サーチライトが会場を照らす、ジャンボリー歌「さあ行こうジャンボリー」が流れる、会場に「ウオー」と、嵐に似たスカウト達の大合唱、そしてプログラムが進んでいく。

大会旗、外国参加国旗、そして大会旗集団。大營火に点火。約二万人の観衆一人ひとりが持つローソク

に、次々に点火されていく様子は感動ものです。雨は相変わらず降っていました。

セレモニーも終盤になり、スカウト達は寒いと訴えるも、感動に酔いしれているのが私には分かりました。きっと一生忘れない日に成るでしょう。その後青木副長に後を頼み、一部のスカウトと共にサイトに戻る事にしました。暗くて広い会場、はぐれないと群衆の中を通りぬけ、山道に出ると歩く背に花火が打ち上げられ、「ウォー」と大観声が湧き上りました。この感動をスカウト達に体験させて良かった。ほんとうに良かった。と私は感じました。雨は一段と激しく降っていました。雨天の中明日は撤収、「夢と感動」にありがとうございました。森吉の大自然にありがとう。

この地に感謝のみを残します。



番外プログラム

茨城35隊 派遣隊長 高橋 正一

場外プログラム(桃洞杉ブナ原生林コース)にスカウトが出発した日、昼過ぎに総務班の種田さんがGHQからの伝言を持って現れた。この手の人が明るいうちに予告無く手ぶらで来ると気が重くなる訳で、昨日はスカウトの財布を拾ったのでGHQまで取りに来るようとの伝言、これは奉仕の村田君に取りにいってもらい助かった(中身の八千円も無事で万歳)。今日は場外プログラム。またなにかやらかしたか?とおそるおそるお聞きすると、“貴隊のスカウトがチェックポイントを通過せず誰かがダツゴクしたらしい。その名は高橋なにがし”とのことで、意味が良く分からないのでとりあえず電話に出てくれとの事だった。高橋は隊長オレ一人しかいないとツツツツ言いながら電話に出ると、我が隊のダツゴク班が遭難したとのことで、帰隊しているかどうかの問い合わせであった。この班は不思議に良くまとまつた班だが、名前の通りチョコマカしたスカウトが揃い、なにをやるか目をはなせない。期間中もペットボトルをもらい歩き(本人達は拾い歩いた)、ほとんどただで飲み水を確保していたらしい。とにかく我が隊では要注意班としてリストに乗っている班だった。ただ幸いな事に、出発の時の諸注意の一つにトイレに行く時も班員全員で行くように指導してあったせいか、それをまもって班ごと行方不明

になってくれた事だ。彼らが偉かった(したたかな)のは、道を間違えたあとゆっくり昼食にし、そのあと進路修正は他の班にサングラスをかけた上班がいることに気づき、道々逆コースを来るスカウトに“サングラスをかけたスカウトに会ったかどうか”をチェックし、まさに追跡ハイクをしながら(地図でコースどりもしたのに、地図を全く見ていない)、しっかりとスタンプを押してもらって3番目(6班中)に帰って来た事だと思う。(これぞダツゴク班の真骨頂かもしれない)。どうして3番目に帰れたのか分からぬが、とにかく道に迷って、あわてて歩き回りとんでもない所に行かず、そのあと落ちついた行動に深く感謝。その他、“また来たか”と言われるため付き添って行きたくないと上班がこぼしたほど救護班に我が隊が一番お世話になったり(上班は救護班で顔と名が売れた)……道ばたに座りほとんど恐喝まがいな記念品交換をやったり(本人達は脅しているつもりはないらしいが、見ているとやはりシッカリ脅している)……隊交歓した大阪〇〇隊に女子スカウト募集のプラカードを持っておじゃました(女子スカウトが一人もいない隊)……なかなか女子スカウトと友達になれないでFM放送で募集したり(何の効果もなかった)と色々なことをやらかしてくれた……そんな中、一人の落伍者も無く、他の人々にも余り迷惑をかけず、元気に帰宅できたスカウト諸君に、スカウトの面倒を最後まで良くみててくれた上班に、隊長に1度しかスカウトを怒鳴らしてくれなかつた副長諸氏に……乾杯。そして、楽しいキャンプを運営していただいた、奉仕スカウト及び指導者の方々に……もう一度、乾杯。

最後に隊長会議以外なにもしなかった隊長に……小さく乾杯。いつかまた、可能ならばこのメンバーでキャンプをやりたいものです。

それは、私だけの希望かもしれないけど……。



編集後記

12N J特集号として編集しました。楽しかったジャンボリーを、思い出して頂けたでしょうか。「夢と感動」忘れないでくださいね。

前回から始まりました【コミッショナー通信】のコーナー、今回はコミッショナー多忙のため、掲載することができませんでしたが、次回はボリュームアップでお届けしたいと思いますのでご期待ください。

広報委員会では1999年1月にホームページの開設を予定しています。SCOUTING茨城様よろしくね。